

令和 7 年度島根県立大学短期大学部
学校推薦型・総合型選抜 社会人・学士 帰国生 私費外国人留学生特別選抜
保育学科 小論文問題

【問題】

以下の文章は、子どもが暮らす場所を訪ねて、子育て支援の現場の特色ある取り組みを紹介したものである。この文章を踏まえて、自分が考える子育て支援について、ふさわしい題名をつけて 800 字以内で論述せよ。

子どもが真ん中の社会を実現するために、子どもと家庭の福祉や健康の向上を目指して「こども家庭庁」がスタートし、子育てをみんなで支えていこうという思いが広がり、子育ての支援を推進する取り組みが各地で行われている。

(略)

黄金色の稲穂が実る 9 月の終わり、こどもむら^注を訪ねた。長年作り手不在であった農地を譲り受けて始めた米作りが間もなく収穫の時を迎える。スーパーマーケットの隣には、コインランドリーがある。どちらも 2023 (令和 5) 年度のこどもむらの新規事業である。たくさん遊んで泥だらけになった服や靴を、買い物をしている間に乾燥まで済ませられる日があれば、家に帰ってからの時間や気持ちに余裕が生まれるかもしれない。

そんな思いや願いを事業化した背景には、「子ども・子育て中心の街づくり」という柿沼学園の法人理念と、「こどもむら」という名に込められた思い — 子どもが育ちやすい一つの地域社会のような村をつくりたい — が根底にある。理想に向かって、というより、ここで生活している人たちの現実や、生の声や思い、声なき声に耳を傾け、求められていることに一つ一つ向き合っていたらこうなったと理事長の柿沼平太郎先生は語る。

(略)

JR の栗橋駅からも見える「子育て案内所 えんむすび」には、絵本や駄菓子、かわいい手作り雑貨が所狭しと並んでいる。駅にある観光案内所の子育て版といったイメージで、気軽に出入りしやすい。仕事帰りに立ち寄る方も多く、助産師さんがいる時間帯には妊婦さんの利用がある。宿題カフェや自習ルームが併設されていて、そこに来た中高生が思春期の悩みなどを相談することもあるそうだ。

多機能型利用者支援事業として、子育て家庭の悩みや相談に応じ、相談者や個別のニーズを把握して支援事業や保育所、施設、地域、行政機関へとつないでいく役割を担っている。何か困りごとがあったときに、駄菓子を買ったり絵本を手にとったりしながら相談することができる。

「えんむすび」の奥には、無料で利用できる学習&フリースペース「寺子屋はうす はぴちる宿題かふえ」がある。小学生の利用は 17 時までで、17～19 時は中高生の自習ルームと

なる。宿題をしながら、そこにいる大人に話をしようと思えば話せる、そんなふうに気軽に話を聞いてもらうことができる場というのはありそうでなかなかないと思う。

子育て支援センター「森のひろば」は、この街で暮らす0～2歳児の親が子どもと一緒に気軽に行くことができる集いの場。木の温かみを感じる室内には、大小さまざまな手作りおもちゃや発達に合った良質なおもちゃが用意されている。お絵描きがブームになってきたので、これまでは1台のテーブルで紙とクレヨンを貸し出していたのを、テーブルを増やしてお絵かきコーナーを新しくつくったり、人気の滑り台はもともとボールを転がすスロープトイとして作ったものだったが、そこに上ろうとする子がいたので、ボールではなく子どもが上って滑れるほうが楽しいかもしれない、と改良されたものであったりと、子どもの姿を見ながら楽しい空間が作り出されていた。「おもちゃだより」というファイルには、おもちゃの写真と共に、遊び方や置いている理由が添えられており、ページをめくるだけでもワクワクする。「うちの子、絵本よりも、このおもちゃだよりが好きなんです」という声があるのも納得である。

現在ここの専任職員をされている方は、同法人の幼稚園での実習が縁で翌年から幼稚園に入職した方で、「森のひろば」開室時間終了後に、同法人の夕方保育に入ることもある。入園を控えた親子からの相談に対しても実際にそこで働く経験があるからこそ返せる言葉があり、必要に応じて各園の入園相談につなげることもあるという。同法人ならではの横のつながりを活かすことは、そこで働く人だけでなく、利用する親子にとっての安心感にもつながる。

注 学校法人柿沼学園認定こども園こどもむら

出典：中澤 智子, 宮里 暁美 「子どもが暮らす場所を訪ねて 子ども・子育て中心の街づくり—学校法人柿沼学園認定こども園こどもむら—」『幼児の教育』123 巻 2 号, 2024（一部改変）